

なぞの遺言書

THE CASE OF THE MISSING WILL

1993年作品

製作:ブライアン・イーストマン

監督:ジョン・ブルース

脚色:ダグラス・ワトキンソン

日本語版プロデューサー:里口 千

日本語版演出:山田 悦司

日本語版翻訳:宇津木 道子

出演:

エルキュール・ポワロ … デビッド・スーシェ/熊倉 一雄

ヘイスティングス大尉 … ヒュー・フレイザー/富山 敬、安原 義人

ジャップ主任警部 … フィリップ・ジャクソン/坂口 芳貞

ミス・レモン … ポーリン・モラン/翠 準子

※ ※ ※

バイオレット・ウィルソン … ベス・ゴダード/島本 須美

セーラ・シダウェイ … ロウイーナ・クーパー/麻生 美代子

ブリチャード医師 … リチャード・ダーデン/大木 民夫

アンドルー・マーシュ … マーク・キングストン/宮川 洋一

フィリダ・カンピオン … スーザン・トレシー/藤波 京子

マーガレット・ベーカー … ジリアン・ハンナ/藤 夏子

ジョン・シダウェイ … テレンス・ハーディマン/山野 史人

ロバート・シダウェイ … エドワード・アタートン/辻谷 耕史

ピーター・ベーカー … ニール・ストウーク/増岡 弘



©ITV Studios Limited 1993

健康が優れないアンドルー・マーシュは、10年前に作成した遺言を変更するとポワロに告げる。古い友人の息子をはじめとした数人に小額を遺し、残りの大部分は主治医の運営する財団へ残すという遺言を、アンドルーが後見人をしていたバイオレットに全額譲るという内容に変更するというのだ。ある夜アンドルーは電話で呼び出され、その後、近くの森で死体となって発見される。死因は心臓発作だが、ポワロは誰かに殺されたのではと疑う。

◆ミス・ディレクションの罫

保守的な男尊女卑から翻意を見せ、友人ポワロに遺言執行を頼んだ矢先に不可解な死を遂げた富豪アンドルー。生前の彼は友人たちとその家族に囲まれていたが、彼らに遺すはずの財産分与を記した遺言書は消えていた。それに呼応するかの様に意味深げな行動を取る関係者たち…。

例によって一筋縄では捉えきれない、複雑な様相を呈する人間関係。クリスティ作品で多いパターンは、“事件の核心となる動機や事実は、全く有りのままではなく、見方の変化や勘違いの為に少し違った様相で提示されていることが多い。”そしてもうひとつは、“核心となる事象以外に、いかにも怪しげだが本質的に関係ない事柄が並行して複数、散りばめられている。”これらのセオリーを、いかにも必然性があるように絡ませ描くのがクリスティの巧みなところ。ポイントは、複層する事柄の一体どれが、少し歪んで見せられている核心であるのかを見抜くこと。本話の真相の構図も、そういう仕掛けとなっています。

◆男女不平等な背景

第一次大戦終結後にはイギリスでも次第に女性参政権が認められ、初の女性国会議員も登場し、1928年には遂に21歳以上の全ての女性に男性と同等の普通選挙権が認められました。しかし完全なる男女同権の獲得までには道半ば。本話でも女性の実業が頭から否定されたり、ケンブリッジ大学で女子カレッジの立場が認められていない様に、経済・社会的な立場における女性の進出などはまだナンセンスな風潮だったようです。

なお序盤にて、女性の地位向上の是非についてイギリス的な論戦を繰り広げるのは、ケンブリッジ大学の伝統あるディベート・クラブであるケンブリッジ・ユニオン。このシーンは、実際のケンブリッジ・ユニオンの建物にて撮影されたそうです。

◆ゲスト再登板

本話の主役とも言べき、逞しく美しいバイオレット・ウィルソンを演じたベス・ゴダードは、同役ではありませんが、本シリーズ後期の『死との約束』にて、重要な役どころであるシスター・アニエシュカとして再登板します。

また、医師と云う仕事の陰でジャップ主任警部と浅からぬ因縁を持つブリチャード医師に扮した、リチャード・ダーデンもまた、異なる役柄ながら、本シリーズ後期『満潮に乗って』において、今度は検視官役で出演しています。